特別インタビュー

「笑う門には福来たる」のわらふくさん。
編集部が毎月、前向きに明るく
くすまずに生きる人の横顔をお伝えします。

今月の わらふくさん

フラワーアーティスト／造形作家

秋谷 祐子 さん

1953年札幌市生まれ。華道歴40年、小原流家元教授。EPJフレッシュ・プリザーブドフラワー本部講師。『ギャラリー・インプレッション』を主宰し、アート作品の展示・販売をしつつも、花をアートとして見せるべく独自の世界を追求している。
http://www.g-impression.com/

撮影／本田写真事務所

華道で培った技法を新たな創作活動に活かす

限りある時間に感じられる花の生命力、その一瞬の美しさに挑戦しているのが『ギャラリー・インプレッション』を主宰する造形作家の秋谷祐子さん。花にリメイクを施し、新たな生命を吹き込ませるドライアートを実践。異素材を取り込んで創作しており、国内外で高い評価を得ている。

ドライアートはドライフラワーとも、プリザーブドフラワーとも違い、花や葉、枝などを自然乾燥させて、違う形状にしてから色づけしていく。例えば葉をドライにしてから、花のように組んで着色し、それを素材のひとつとして新たな作品を生み出すのだ。そんな技法にたどり着いたのは、「ドライ化した生け花とでもいうべき、和のドライアートに挑戦したかったから」。

秋谷さんの作品はダイナミックでありながらも緻密な計算と繊細な感性がうかがえる。昨年、フランス芸術協会より国際美麗芸術大賞を受賞した作品『花魁』は175センチという大作で、朱染めの枝と金扇に袋帯などがフラワーとともに生けられており、凛とした美しさや誇りの中にも悲哀を漂わせた江戸の遊女の佇まいを感じさせる。

創作し続けることで終わりのない旅を進む

以前はモデルとして活動し、モデル事務所を立ち上げて第一線で活躍。平行して色彩感覚や美意識の向上、精神統一の鍛錬のために華道を究め、小原流家元教授という肩書きを持った。「事業は順調でしたが、45才のとき新たな挑戦を決意。長く嗜んできたフラワーに携わろうと、ギャラリーと創作活動を始めました」と話す。

花は美しく癒されるが、その輝きは短く、道外や海外へ搬出することも難しい。さらに「ジャンルにとらわれないアート性の高いものを生み出したい」という思いから、最近ではステンレスやアクリルファイバーなどの異素材も作品に取り入れている。「実家がステンレス加工業をしているので、鉄や銅、アルミなどが身近な存在でした。異素材を作品に用いることで表現の幅が広がりました」。秋谷さんの手にかかると無機質な鉄や銅が花のように生けられ、作品という小宇宙の中で躍動しているかのよう。「やってみたいこと、おもしろいと感じたことは、やってみないと気が済まない。有言実行。ときには自分への試練になることもありますが、乗り越えるたびに多くのものを得られる」と生き生きと笑顔で話す。

モダンジャパニーズの極みをジャパン・エキスポで披露

華道の大家である一方、フラワーアートの造型をこえた独創的な美の世界を創出している秋谷さんは活躍の場をどんどん広げている。『ジャパン・アート・コレクション』や海外のアート展への出展、「米米CLUB」石井竜也氏とのコラボレーション、さらに今年はドイツでの個展のほかフランスで行われるジャパン・エキスポでライブパフォーマンスをすることが決まっており、「テーマは百花繚乱。世界の舞台でモダンジャパニーズの魅力を披露したい」と意気込みを話してくれた。

精力的に活動し続けている秋谷さんに息切れすることはないのか尋ねたところ、「休日も創作していますね。創作意欲も次々に湧き出るので、創ること、考えることが楽しくて仕方ない。人生はなるようにしかならないけど、なるようにならしめる。自分に負けるのが嫌だから立ち止まりたくない。いくつになっても諦めちゃダメですよね」。これからも美しい世界を創出し続けていく秋谷さんの活躍が楽しみだ。

宇宙における無数の星雲の流れや色、形をイメージした『スペースファンタジア』（2009年制作）。アクリルや銅などを用いながら、生け花のような世界観を創出

なるようになる。
が、絶対にならしめる。